＜前回：言語・解釈・物語――民族、民族のメタファー化＞

民族とは、個人と共同体の「生」（生命、生活、伝統の総体）に実体的基盤を与えるという点で共同体の実体原理であり、キリスト教の土着化とは、この共同体の実体的基盤とキリスト教信仰の間に具体的な接点を構築し、民族的伝統との積極的関係を生み出すことに他ならない。・・・内村は、こうした実体原理と批判原理との統合の原型を、古代イスラエルの預言者に見いだしたのである。

１．自己同一性を失わず、民族的状況に埋没することなく、キリスト教は民族と民族主義とにどのように向かい合うことができるのであろうか。

２．内村鑑三の場合、内村は反民族主義者か？
　内村の有名な「二つの J」（Jesus と Japan の二つへの愛）
　　→　愛国者、民族主義者としての内村

４．キリスト者としての自己同一性の原点である Jesus と適応すべき状況としての Japan、この双方を同時に愛する、これはどのようにして可能になったのであろうか。

５．内村の非戦論の形成過程から。義戦論から非戦論へ

８．「I for Japan; Japan for the World; The World for Christ; And All for God.」
　「足尾銅山鉱毒事件は大日本帝国の大汚点なり。」（「鉱毒地巡遊記」）

10．愛国思想の内実：農業を中心とした非軍事的な小国としての日本

11．古代イスラエルの預言者の思想と生き方　→　自己超越的な民族主義

12.キリスト教信仰と民族への愛とは矛盾しない――もちろん、この実体的基盤の中身が問題であるが――。しかし、実体原理としての民族には、しばしば逸脱・歪みが生じる（罪という問題、あるいはティリッヒの言う疎外、両義性）。自民族中心主義・排他主義はその逸脱・歪みの典型であり、逸脱した実体原理は修正と批判を必要とする。修正・批判原理は実体原理としての民族よりも上位に位置付けられねばならない。キリスト教は実体原理としての民族を、正義あるいは神との関わりという視点から批判し、その逸脱を正すことによってはじめて、真の意味において民族に貢献することが可能になる。内村にとって、間違った近代化を推進しつつある民族主義を批判することは、まさに真の愛国と同一の事柄だったのである。

13.「愛国」の意味転換プロセス＝「民族のメタファー化」、「批判（否定）→転換→拡張（肯定）」という意味転換プロセス。「民族・国家を愛する」という際の民族・国家についての新しい理解の生成。富国強兵という国民国家の理想から「精神性に富んだ非軍事的小国」への意味のメタフォリカルな移行。新しい認知。

１０．　言語・解釈・物語２――――自己

０．現代における実体的な自己概念の問題化

・クローン技術の場合：反対論・クローン技術を人間に万一適応することが企てられるならば、それは「人間の尊厳」を冒涜するものである。

・人間の尊厳は何によって構成されるのか。

人間のアイデンティティがその遺伝子（ＤＮＡ）によって決定されるという遺伝子決定論に対して。自然主義。

・近代的な言説における「人間の尊厳」は個的実体としての人格・魂を存立の座とするものであり、近代的人間理解における自律性、主体性、自由意志などの特性と密接に関わっている。デカルト、カント。

（１）近代的自己概念は虚構か。

１．小坂井敏晶『責任という虚構』東京大学出版会、2008年。
「人間は主体的存在であり、自己の行為に責任を負わねばならない。この考えは近代市民社会の根本を支えている。」「しかし社会科学や認知科学はこの自律的人間像に疑問を投げかける。」「ハンナ・アーレントによるホロコースト分析」(1)
「自由・主体性（内発的要因）と、外部環境による規定（外発的要因)、それぞれの重みを探るという問題意識」「しかしこの発想は初めから論理的誤りを犯している。個人的要素とは何か。」「肉体と外界の影響の両方から独立する精神や主体性は存在しない。」(9)
「我々は結局、外来要素の沈殿物だ。」「「自由な行為者」も、それ以前に形成された人格に基づく以上、この論理は無限背進する。」(10)
「行為を起こす内的要因としての自由意志とは何なのか。」(11)
「自分のことは自分自身が一番よく知っている」「一種の信仰」(16)
「行動や判断の説明は、所属社会に流布する世界観の投影」、「人間は理性的動物というよりも、合理化する動物」、「自分自身で判断し行為すると錯覚する」、「この自律幻想は近代個人主義イデオロギーと深い関連」(19)
２．近代的な人間理解に対する懐疑は、19 世紀以降、マルクス、ニーチェ、フロイトといった近代社会を批判して思想家たちが共有していたものであり、社会心理学、そして脳科学（リベット実験など）は、この批判的懐疑論を科学的水準で再提示した。
３．「主体は実体的に捉えられない。主体とは社会心理現象であり、社会環境の中で脳が不断に繰り返す虚構生成プロセスを意味している。」(22)「デカルトが考えたような統一された精神や自己ではない。脳では多くの認知過程が並列的に同時進行しながら、外界からもたらされる情報が処理される。意識とか意志とか呼ばれるものは、もっと基礎的な過程で処理されたデータが総合された生産物であり、行動を起こす出発点というよりも逆に、ある意味での到達点をなしている。」(25)
「人間は言語を媒介とする意味世界に生き、外界に開かれた認知構造を持つ」、「この安定した内部環境のおかげで生物は、変化に富んだ外界に随時適応しながら生存できる。同時に、認知的に外に開かれた人間には、自己を閉じるための装置が要る」(26)
４．近世哲学において自由意志をめぐってなされた哲学論争は、人間の実態から乖離した概念枠が生み出した擬似問題であった。しかし、それは近代世界の信憑性を支える基盤に関わる仮説だったのであり、それを批判的に可視化することは決して容易ではなかった。近代以降のキリスト教思想も同様の人間理解をかなりの程度共有していた。

11．　言語・解釈・物語３―――自己（続）

０．キリスト教思想における自己論。
　悪・罪と自由意志論　→　問いとしての自己
　　自己の不透明性・脆弱性
　　有限性、罪責性、無意味性（ティリッヒの不安の類型論）

（1）キルケゴールの自己論

１．『死に至る病』（岩波文庫、1849）：絶望の現象学から絶望として罪論へ
２．反省や参照という概念は、人間存在の基本構造に関して使用され、精神や自己といった人間理解の基礎概念として位置づけられる。
「人間とは精神である。精神とは何であるか？ 精神とは自己である。自己とは何であるか？ 自己とは自己自身に関係するところの関係である、すなわち関係ということには関

係が自己自身に関係するものになることが含まれている、――それで自己とは単なる関係ではなしに、関係が自己自身に関係するというそのことである。人間は有限性と無限性との、時間的なるものと永遠的なるものとの、自由と必然性との、綜合である。綜合とは二つのものの関係である。しかしこう考えただけでは、人間はいまだなんらの自己でもない。」（20 頁）、「関係がそれ自身に対して関係するということになれば、この関係こそ積極的な第三者なのであり、そしてこれが自己なのである。」（21 ）
「絶望とは自己自身に関係する関係としての自己（綜合）における分裂関係である」、「綜合のうちに分裂の可能性が存するのである。」（24）
「絶望とは分裂関係から結果し来るのではなく、自己自身に関係する関係から結果し来るものだからである。そして人間は自分の自己から脱け出ることができないように、自己自身への関係から脱け出ることもできない。」（27）
「自己のうちなること病」（29）
「自己自身に関係しているような関係である。これが自由である。ところで自由は可能性と必然性との規定における弁証法的なるものである。」（45）
「自己は無限性と有限性との意識的綜合であり、自己自身に関係するところの綜合である。自己の課題は自分自身となるにある」、「自分自身になるというのは具体的になることの謂いである。」（46）
「生成の途上」（47）
３．「精神」「自己」としての「人間」:「関係が自己自身に関係する関係」という仕方での自己関係、つまり自己参照性によって特徴付けられている。自己関係は、反省や参照（あるいは言及性）一般がそうであるように、自己自身に関係することによって、最初の自己関係を変化させ、そこに生成のプロセスを生起させる。これは変化における自己同一性あるいは自己同一性の変化、さらには自己言及のパラドックスなど、人間存在に特有の問題を派生させる。
　可能性としての絶望　→　不安

（２）近代と制度的自己再帰性――ギデンズ

４．近代と不安、近代的な不安の現象形態
５．ギデンズの近代社会論における「再帰性」（reflexivity）概念――「A についての言及が、A 自体に影響を与えること」――。
６．人間存在の基本構造
　　→　近代特有の現実性としての「制度的再帰性」（the institutional reflexivity）
　人間存在の基本構造の近代特有の特殊的現実化・形態化。
　つまり、再帰性が社会制度として存在すること、ここに近代的システム特有の問題が認められる。
７．制度的再帰性の具体的形態としてのが近代的知。
　近代的知の特性は、「モダニティでは根本的懐疑の原理が制度化されており、そこではすべての知識は仮説のかたちを取らざるをえない」（Giddens, 1991, 3）という点に現れている。
８．再帰的知識の典型としての近代科学的な知：再帰的な知識とは、一度確立されれば不動の地位を獲得する知識、あるいは一切の懐疑をあらかじめ超越しているすべての知識の根拠といったものではなく、絶えず自己に参照的に関わることによって、繰り返し検証されることを自らの内に組みこんだ知識、つまり、「仮説－経験的検証（実験）」プロセス

において構造化された知識である。そして、こうした再帰的な知が、科学者集団という担い手によって制度化されているところに近代的知が成立しているのである。

９．キリスト教神学の場合。

「自己言及的な精神的活動」である「反省」あるいは「自己反省」は知一般を構成しているものであるが、これは神学にも妥当している（Dalferth, 1988, 49）。

「キリストにおける神の救済的な啓示は、常にキリスト教神学にとって中心的であり続けてきたが、近代神学においてはじめて、17 世紀に提起された認識論的問題の圧力のもとで、啓示論が重要なものとなった」（ibid., 39）。つまり、近代における神学的知においては、知の内容をめぐる議論（神学体系の本論）に対して、知識の獲得の仕方や知の真理性の判定に関わる方法論的手続きについての議論（神学のプロレゴーメナ）がしだいにより大きな比重を占めるようになる。

10．パネンベルクが指摘している宗教戦争後の教派的多元性の状況。

神学的知における再帰的メカニズムの作用というべき事態。制度化（大学と出版）。

↓

パネンベルクやヒック：神学的知の仮説性

11．ルーマン、ドゥルーズなどの現代思想におけるシステム論

12．近代の制度的再帰性の帰結：

懐疑という再帰的営みを制度化することにより（懐疑の制度）

→　既存の「確実な知」を解体。

伝統的な宗教的な権威（聖書や伝統、そして啓示）も例外ではない。

→　近代聖書学の成立は、この懐疑の制度化を象徴する出来事。

近代のキリスト教神学では、方法論や知の基盤をめぐる議論（体系のプロレゴメナ）に多くの努力が傾けられることになる。

13．制度的再帰性としてのモダニティの自己修正・自己拡張的な動態。

再帰的に自らのシステムに関わることによってその欠陥や不十分さを修正しつつ、無限に自らを拡張してゆく（システムの自己修正と内部準拠性 によるシステムへの繰り込み――近代・モダニティは再帰的な未完のプロセスであり、モダニティから、それ以降は生じない。ポスト・モダンという逆説――）。

↓

社会システムの外部の問いは内部へと繰り込まれ、「外部」という仕方では存立し得ないことになる（自然主義・歴史主義）。

近代的な知の営みにおいては、「神」でさえも、たとえば、人間の類的本性の投影として、社会システム内部で処理される。

14．アンソニー・ギデンズ『モダニティと自己アイデンティティ――後期近代における自己と社会』

「自伝は過去への修正的介入であって、単なる過ぎ去った出来事の年代記ではない。」「過去との決別」、「感情的経験の修正訓練」「過去の再構成は、未来に起こりうる人生の軌跡に対する期待とともに進むものだ。」

「「自分自身の人生を引き受けること」は、様々な開かれた可能性に直面することを意味するため、リスクをはらんだものとなる。」（79）

「自己アイデンティティの探求は近代的問題」（81）といった見解にも「何かしら見るべきものがあるのは疑いえない。だがモダニティの独自の特徴として争点になっているのが「個人」の存在であるとは、ましてや自己であるとは、私は思わない。「個人性」は確実にす

べての文化において」「尊重されてきたし、個人的可能性の開拓にしても、ある意味ではそうである。」「もっと精緻に分析すべきなのである。」（82）
「自己は再帰的プロジェクトであり、個人はその責任を負っている。」「私たちは私たちが現にそれであるものではなく、私たちが私たち自身から作りあげているものである。」「自己は過去から予期される未来へと続く発達の軌跡を形づくる。」「自己の再帰性は広く浸透するものであると同時に、継続的でもある。」「この意味での再帰性は、モダニティの再帰的歴史性に属しており、より一般的な行為の再帰的モニタリングからは区別される。」（83）
「自己アイデンティティは、一貫した現象として、物語を前提とすることがはっきり示される。日記をつけること、そして自伝をきちんと作りあげることが、自己の統一感覚を維持するために中心的に促されることだ。」「自伝は」「近代社会生活における自己アイデンティティの中核に位置しているのだ。」（84）
「自己実現は、時間をコントロールすることを意味する。」（84）
「リスクと懐疑」
「世俗的なリスク文化を生きることは本質的に不安定なこと」「リスク計算自体によって生み出される不安」「生活設計を取り扱い可能な大きさに縮めることの難しさ」（206）
「存在論的不安」

（３）物語的自己同一性
・ポール・リクール『時間と物語Ⅲ　物語られる時間』新曜社、1990年。
「歴史と物語の交叉する指示」
「宇宙的時間に再記入された歴史的時間と、フィクションの想像的変化にゆだねられる時間との対比」から「歴史のフィクション化とフィクションの歴史化が交叉する過程から生じた歴史とフィクションの相互浸透」「この相互豊饒化」
「個人または共同体に、物語的自己同一性（identité narrative）と名づけることのできる特殊な自己同一性」
「個人または共同体の自己同一性を言うことは、この行為をしたのはだれか、だれがその行為者か、張本人か、の問いの答えるものである。」
「その名で指名される行為主体を、誕生から死まで伸びている生涯にわたってずっと同一人物であるとみなすのを正当化するものは何か。その答えは物語的でしかあり得ない。「だれ？」という問いに答えることは、ハンナ・アーレントが力をこめてそう言ったように、人生物語を物語ることである。物語は行為のだれを語る。〈だれ〉の自己同一性はそれゆえ、それ自体の物語的同一性にほかならない。」（448）
「〈同〉の抽象的同一性とは違って、自己性を構成する物語的自己同一性は、生の連関のうちに変化、動性を内包することができる。」「主体は」「自分の人生の読み手であると同時に書き手として構成されて現われる。自叙伝の文学的分析が立証するように、人生物語は、主体が自分自身について物語るあらゆる真実もしくは虚構の話によってたえず再形象化され続ける。この再形象化は人生それ自体を、物語られる話の織物とする。」（449）
「物語的自己同一性は、安定した、首尾一貫した同一性ではないこと」
「物語的自己同一性は、主体が単独の個人であれ、個人の集まった共同体であれ、主体の自己性の問題を汲むつくすことはないこと」
「物語は行動のカテゴリーに属するとはいえ、意志力よりも想像力を行使する。」（452）
「物語的自己同一性が真の自己性に等しくなるのは、倫理的自己を自己性の最高の要因と

する決意の契機によってのみである。」「約束の分析」(453)
・ポール・リクール『他者のような自己自身』法政大学出版局、1996年（原著1990年）。
　　自己性と同一性、人格的自己同一性と物語的自己同一性

（4）告白という問題――聖書と告白文学

１．告白文学とは？　アウグスティヌスやルソーの『告白』、あるいは近代日本の私小説
２．告白とは？　　だれが、だれに、何を、どのようにして
３．詩編：祈りという形態における告白
　　個人が神に→人格的な関わり・応答関係（ブーバー：「我－汝」）
４．罪は告白されるときに言語化される（リクール）。→告白の現象学
　　・罪の表出の原初形態としての告白
　　・人間のもっとも内面的な秘密の事柄は告白を求める
５．祈り（祈祷論）：讃美、感謝、懺悔＝告白、祈願、執り成し
　　・なぜ祈る必要があるのか。神が全知全能であるならば。
　　・何を祈るべきか。　　・祈りないときにどうしたらよいのか。
　　・祈りは聞き届けられるのか、聞き届けられない祈りはどうなるのか。
・言葉の選択と吟味、内容の反省
・「文学としての祈り」（関根正雄『旧約聖書文学史』上下、岩波全書）
６．書簡（パウロ書簡）：手紙に挿入された告白
　　神と自己との関わりについての証言という形態を取る。
７．書簡の受け手、テキスト化：特定の聴衆から一般の読者へ
　　↓
８．文学ジャンルとしての告白＝告白文学
９．アウグスティヌスの『告白』
　　・作品となった「告白」あるいは「告白」として提示された思想。
　　・二つの時間性（自然的時間と内的時間）が物語的時間の中に組み込まれている。
10.「自伝」としての告白：自己同一性の確認と提示、生成する自己
　罪＝自己の内的分裂に対する自己の回復としての告白

＜詩編 51 編＞

1 【指揮者によって。賛歌。ダビデの詩。
2 ダビデがバト・シェバと通じたので預言者ナタンがダビデのもとに来たとき。】
3 神よ、わたしを憐れんでください／御慈しみをもって。深い御憐れみをもって／背きの
罪をぬぐってください。4 わたしの咎をことごとく洗い／罪から清めてください。5 あな
たに背いたことをわたしは知っています。わたしの罪は常にわたしの前に置かれています。
6 あなたに、あなたのみにわたしは罪を犯し／御目に悪事と見られることをしました。あ
なたの言われることは正しく／あなたの裁きに誤りはありません。7 わたしは咎のうちに
産み落とされ／母がわたしを身ごもったときも／わたしは罪のうちにあったのです。

＜ローマの信徒への手紙＞

7:14 わたしたちは、律法が霊的なものであると知っています。しかし、わたしは肉の人
であり、罪に売り渡されています。15 わたしは、自分のしていることが分かりません。
自分が望むことは実行せず、かえって憎んでいることをするからです。16 もし、望まな
いことを行っているとすれば、律法を善いものとして認めているわけになります。17 そ

して、そういうことを行っているのは、もはやわたしではなく、わたしの中に住んでいる罪なのです。18 わたしは、自分の内には、つまりわたしの肉には、善が住んでいないことを知っています。善をなそうという意志はありますが、それを実行できないからです。19 わたしは自分の望む善は行わず、望まない悪を行っている。…… 24 わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。死に定められたこの体から、だれがわたしを救ってくれるでしょうか。25 わたしたちの主イエス・キリストを通して神に感謝いたします。このように、わたし自身は心では神の律法に仕えていますが、肉では罪の法則に仕えているのです。

＜アウグスティヌス『告白』＞

第一巻第一章

一　偉大なるかな、主よ。まことにほむべきかな。汝の力は大きく、その知恵ははかりしれない。

　しかも人間は、小さいながらもあなたの被造物の一つの分として、あなたを讃えようとします。それは、おのが死の性を負い、おのが罪のしるしと、あなたが「たかぶる者をしりぞけたもう」ことのしるしを、身に負うてさまよう人間です。

・・・

よろこんで、讃えずにはいられない気持にかきたてる者、それはあなたです。あなたは私たちを、ご自身にむけてお造りになりました。ですから私たちの心は、あなたのうちに憩うまで、安らぎを得ることができないのです。

・・・

主よ、私はあなたを呼びもとめたずね、信じながら呼びもとめたい。

・・・

＜参考文献＞

０．『キルケゴール著作集』白水社。
　『キェルケゴール著作全集（原典訳記念版・全 15 巻）』創言社。
１．キルケゴール『死に至る病』岩波文庫。
　Soren Kierkegaard, *The Sickness Unto Death. A Christian Psychological Exposition for Upbuilding and Awakening*, Princeton University Press,1980.
２．アンソニー・ギデンズ『モダニティと自己アイデンティティ――後期近代における自己と社会』、ハーベスト社、2005 年（Anthony Giddens, *Modernity and Self-Identity. Self and Society in the Late Modern Age*, Stanford University Press, 1991）。
３．Ingolf Dalferth, *Theology and Philosophy*, Wipf and Stock Publishers, 1988（2001）.
４．ドゥルーズ『差異と反復』河出書房新社（Gilles Delueze, *Difference et repetition*）
５．ウルリッヒ・ベック『世界リスク社会論――テロ、戦争、自然破壊』、平凡社、2003 年（Ulrich Beck, *Das Schweigen der Wörter. Über Terror und Krieg*, Suhrkamp, 2002）。
６．アウグスティヌス『告白』岩波文庫、『アウグスティヌス告白』中央公論社。
７．山田晶『アウグスティヌスの根本問題』創文社、『アウグスティヌス講話』新地書房。
８．リクール『悪のシンボリズム』渓声社。
９．オリゲネス『祈りについて・殉教の勧め』創文社。
10．棚次正和『宗教の根源――祈りの人間論序説』世界思想社。